未生御流
華道中傳
體用相應之巻
完

377

82
481

076042-000-0

特42-377

未生御流花術中伝体用相応之巻

未生斎　広甫／著

M37
CEO-0219

特42
377

未生御流
體用樞應之卷 完
巻末中傳

此の書籍は

は書寫して授け来りしも其不
ざるを以て先師廣甫法眼之
ねく門人に頒たれしが其後愛
印行して普
甫師に及び所以ありて後たこを筆寫する
の止むを得ざるに至れり然るに傳寫之際
往々亥豕の誤りを生し斯くては後来却て
其本旨を失はんことを恐る故に此度更に
之を校訂して聊か其文字体裁を改め再び

明治
37. 2. 20

活刷して門生に頒たんと欲すること爾り

明治二十七年一月

未生齋廣甫誌

夫初傳の花形は天地人の三才を躰用留と號付て愛し中傳の花形は性情の兩氣を躰用と號づけて愛す躰用と別といへども性と情とは即躰用なるが故に一理なり躰は性なり用は情なり此の如く挿たる花の姿は縱横句弦の格を離れ空中にて其格を守故に肉眼を去り心眼の通づる處に隨ひ陰陽和合の緣を結び虛實等分に備へ姿の變化自由なるべし譬へば眞行艸の文字を書ずとく偏は陰なり旁は陽なり偏と旁の間に和合

の縁を結びて種々の姿形をなす挿花の働らき此理に同し先づ一本の枝を姿能揉て花瓶に移したる處是躰なり此枝に准じて體よく小枝を添る是皆用なり前一本の枝と悉く縁を結ひて挿たる處躰用相應の姿なり又人道に取ては躰は一家の主人の如し用は眷屬の如し主人は則其家の體なり眷屬は用なり主人眷屬同志にして其家脩る是則躰用相應なるの所以なり且艸木は非情無心なるものといへども天地寒暖の惠を受て時をたがへず花咲實を結の德あれば是を愛して陰陽和合虛實等分躰用相應の道理を辨ふべき事肝要なり

傳花自錄

○挿花德相貧相閑靜之心得　一
○同姿皮肉骨之心得　一
○眞行艸花臺扱同花挿方之心得　二
○從君公所賜之器同花取扱之心得　三
○從貴人挿花御所望之時之心得　三

○紫陽花挿方之心得　四
○枇杷挿方花葉遣樣之心得　四
○和睦之花挿方之心得　五
○香席花挿方之心得　五
○陣中にて花挿方之心得　五
○五重切花挿方艸木取合之心得　六
○遠山霞花之景色挿方之心得　六
○沖往來之船之景色花挿方之心得　七
○渚往來之船之景色花挿方之心得　七
○掛り船之景色綱花挿方之心得　八
○木物揉方之心得　八
○木賊苅込挿方揉樣之心得　九
○伐竹に筍應合挿方之心得　九
○三方正面之花挿方之心得　十
○福壽艸。水仙。根遣之心得　十　二ケ條
○菊。百合。杜若。芍藥。椿。柘榴。南天。

右之七種花遣方之心得　七ケ條　十一
○銀柳。米柳。數多挿方之心得　二ケ條　十二
○猫柳玉取挿方之心得　十二
○同水潛挿方之心得　十二
○糸柳長閑之景色挿方之心得　十三
○同春風に隨ふ景色挿方之心得　十三
○同雪中之景色挿方之心得　十四
○同綰柳挿方之心得　十四
○羽衣艸。小車艸。辨慶艸。線繡菊。小菊。瞿麥。蘭艸。男郎花。女郎花　右七種段取挿方之心得　九ケ條　十五
○細藺。三角藺。富久藺。琉球藺。太藺。右藺物五種段取挿方之心得　五ケ條　十六
○消梅。桔梗。蓍萩。野芥子艸。角木賊。右五種數挿之心得　五ケ條　十七
○荻。芒。檜扇。紫蘭。岩蘭。金雞蘭。宿砂。熊鷹蘭。檀特艸。爵金蕉。美人蕉。芭蕉。右軸附葉物十

二種挿方之心得　十二ヶ條　十八
○唐車前子。岩井路。多嘉羅子。玉簪花。水芭蕉。紫苑。唐紫苑。芭蘭。濱藜蓋。蓋。右葉物十種挿方之心得　十ヶ條　二十一
○胡蝶花。鳶尾。白頭花。萱艸。正宗菖蒲。蒲。花菖蒲。杜若。雅蒜。蘭。右長葉物十種挿方之心得　十ヶ條　二十六
○南性北性之楳挿方之心得　三十
○臥龍楳挿方之心得　三十
○牡丹。冬牡丹挿方之心得　三十一
○棣棠玉川之景色挿方之心得　三十二
○藤。川骨。杜若。三種挿方之心得　三十二
○杜若。三州八橋之景色を移し挿方之心得　三十三
○川骨一色挿方之心得　三十四
○蓮。川骨。杜若。花澤瀉。水葵。五種挿方之心得　三十四

○涅槃像に奉献之花挿方之心得　三十五
○實物一切取扱之心得　三十五
○左旋右旋之論　三十五
○萬物虛實之論　三十七
○花術心得艸木人畜出生之論　三十八

右百箇條目錄終

百箇條傳記

挿花德相貧相閑靜之心得

○德相の挿方は萬枝に障なく勢ひ能く用に滿開を遣ひ躰は用に准じて半開を遣ひ留に莟をつかふ尤惣躰に花多く開景色あるを德相といふ貧相といふは挿上たる姿に柔味なく勢ひ強き枝の花葉を心をも籠ず透し淋しく挿たるは巍くして嶮山を詠るがごとく諸人好ざれば是貧相なり又閑靜といふは挿上

たる姿しはらしくふらくと出たる枝に強みあり花葉少くして風流に挿たるを閑靜といふなり兎角枝葉は和らかに揉め其風姿自然に曲りたるごとく揉口の見へぬやうに勘考して挿る事肝要なり

挿花皮肉骨之心得

○挿たる花の姿を皮肉骨と唱ふる時は頂は皮なり半は肉。根本は骨なり故に躰の枝を渦に揉。肉十分に備へ肉にて用の格を兼挿る事肝要なり偖客位の花は陰より陽をさして出たるゆへに躰の枝は陰に元付て右旋に揉る主位の花は陽より陰をさして出るゆへに躰の枝は陽に元付て左旋に揉る左旋右旋は即天地寒暖の旋る處なれば陰陽の花の挿方に自然の道理を備ふるなり揉方口傳

眞行草花臺用樣同花挿方之心得

○右花臺三面床に置時は中央へ眞の花臺明り口へ行の花臺床柱の方へ草の花臺と据へるなり且花は眞

行草と挿べし眞の挿方といふは躰の枝に花葉多く茂りて姿暖に籠りたる風情を備へ用留は輕々と正直に挿る是眞の挿方なり行の挿方といふは花の天地に枝葉を閑靜に遣ひ半に花葉多く挿たるは行の挿方也草の挿方は半より下に花葉多く根本に風流を備へ水際涼く挿たるを艸の挿方といふ偖花器は眞は銅行は土器艸は竹器よろし眞の花臺眞の花の時候は冬なり行の花臺行の花の時候は春秋なり艸の花臺草の花の時候は夏也又花は眞は木物行は花車なる木もの但し強き艸花よろし艸はやさしき草花水草など至極なり右眞行艸の花臺扱ひ花の取合四時同意なり是の如く挿たる時は四季を目前に詠むるの働あり能々考て挿べし

從君公所賜之花器同花取扱之心得

○拜領の花は隨分大切に取扱ひ枝葉心儘に揉る事遠慮すべし若誤て折らんもはかりがたき故なり挿花

の法を備へ徳相に挿たるぞ至極なれ掛置は花の姿に應しいづれ床の中央に挿るなり書院は釣香爐に焚香ありて然るべし又拜領の花器但し高位高官の御方の銘ある花器取扱ひ同意なり

從貴人挿花御所望之時之心得

○貴人の御前へ出て挿花を御覽に入る、時は花手前等萬事の心得失念なき樣肝要なり尤位正敷艸木を用ゆ併し御好の花なれば御意にしたがふべし若亦御前へ召れぞ御所望あらば差圖の席にて挿なり夫より取次の人御側へ持行る、事なれば姿の濫れざる樣の心得あり口傳

紫陽花挿方之心得

○此挿方は牡丹に准ず躰用とも格先へ大花を遣ふ事凶し花なき幹にて格を取る是牡丹の黑木の心尤枯木にてもよろし夫より小花を遣ひ大花は引込て遣ふなり格先へ大花を遣ひては姿調ひがたく風雅に

あらず又葉も大葉故心を籠て遣ふべし切葉を遣ふてよろし且又木蓮なども同様格先へ開花を遣ふ事凶し花なき幹を姿よく挿て荅開の花を程よく應合の意なり右心得是のごとし

枇杷挿方花葉遣様之心得

○此出生は大小の葉陰陽〳〵と向ひ合て榮ふる物なり故に挿花に愛する時も葉をすかすに其心得有べし是の如く葉行義正しき物なる故に挿たる花の半に横一文字といふて虚實の一葉を遣ふ此遣方又花の遣ひ方口傳あり

和睦之花挿方之心得

○此席の花は檜の木に時候の草花を應合て挿なり花は白き花よろし檜は陰木なれば陽氣を捺るの理なり右心得是のごとし

香席之花挿方之心得

○此席は茶席と違ひ大席なれども花は茶席の心にて

派手に挿す都て匂ひある花凶し爭ふ意ある故なり隨分上品の艸木を用ゆ尤花の姿は席に應して大小有べし香ゆ主なる故花は閑靜なるゆよろし右心得是のごとし

陣中にて花挿方之心得

○此時は陽氣なる花を十分派手に挿べし武き士の心をも和らげ安んずるの意肝要なり椿または早く散花又垂物の類を忌べし垂物は半にして後に戻り手弱き性なればなり總て強き花を挿る事第一なり右心得斯のごとし

五重切五卷筒挿方草木取合の心得

○柳春上　二 白梅　三 白椿　四 千兩 金丁花　五 万年青

白藤　上 黄梅 山吹　桃 大手まり 鈴かけ　胡蝶花　岩蕗 芭蘭　小葉　金錢花

四季とも右取合に准じて色の見切又艸木の位を勘考し白紫黄紅赤と上より順に遣ふべしいづれ上口

へは垂物を用ゆ鐵線　風車　金錢花　定家蘿　夏黃梅
白萩　蔓嫌或は蔦蔓　連翹の葉ばかり抔も遣ふ偖又
蔦の紅葉定家の紅葉是葉の色なる故に此下に白き
花を遣ふ事もくるしからず尙此二種は四季とも上
口に遣ふてよし又赤き實物の下に黃色の花を遣ふ
も苦しからず七種も九種も挿る事あり能〳〵考へ
用ゆべし

遠山霞花之景色挿方之心得

○此時は二重又は三重切の花器にて下に木ものを挿
上口に草花を挿るなりされば山上の草花を山下よ
り見あぐる景色なる故遠見なれば花葉明白に分り
難き風情に挿る菊抔を遣ふ時は葉計を躰用留と挿
其の間々へ荅半開をちらく〳〵と見へ隱れに遣ふな
り又。石竹。藤瞿麥。麒麟草。布袋艸。しもつけ。是等
は花小くして數も分らぬ樣なる物故至極よろし自
然に霞の情備るなり尤下口に挿たる木の丈は上口

に挿たる艸花よりも高く遣ふ事傳なり

沖往來之船之景色花挿方之心得

○此船は床縁より指尺にて七ッ半或は八ッ目に釣る沖の船は高く見ゆる故なり花の挿方は艫花帆花ともに霞花の心にて明白に見へぬ樣の艸木を用ゆ故に艫花には。天門冬の蔓。糸杉。金雀花。此類か宜し帆花は霞花に用ゆる艸花の類なり

渚往來之船之景色花挿方之心得

○渚往來之船は床縁より四ッ半或は五ッ目に釣る磯の船は低く見ゆる故なり是に仍て艫花帆花共に明白に見へる樣に挿るされば艫花は。猿猴杉。柳。糸櫻。蔓嫌。藤此類帆花にも花葉枝數のよく分るやうの草木を用ふべし

掛り船之景色綱花挿方之心得

○掛り船綱花之挿方は船の後より船底を潜らせて艘の方の手前へ振出して挿るなりされば。藤。蔓嫌。猿

猴杉。此類を用ゐ留の枝は釣手の内に面白く遣ふべし帆花の姿に見へざるがよろし右三景の船挿方是の如し

木物揉様之心得

○南天。梅嫌。此外諸木揉難き物を揉る時は紙を藥水に浸し枝を卷て炭火にて揉る小枝は蠟燭にて揉る又柳の類和らかにして揉のきかぬものは何れ火揉にして自由なり口傳

木賊苅込挿方揉様之心得

○右數多挿る時は躰を虚實にして挿花の法に揉る出生の直き處は用留にて取る花器は居物宜し應合は四季とも艶しき艸花を遣ふべし又若芽有時は株を分て若芽を遣ひ出生を顯はす應合の艸花も幾株も遣ふなり又水陸を分て杜若。川骨。猿猴草。などを應合て能うつるなり木賊揉方口傳

伐竹に笋應合挿方之心得

○注連の傳の伐竹は初傳に出たる如く二本に三枝備へ節は五ツなり又三本の挿方は長き竹に四節二枝を備へ上は大斜に伐る中の竹に三節二枝備へ上は中斜に伐る短き竹に二節一枝を備へ上は平に伐る此三本姿よく挿て筍二本應合葉の備へ方は初傳に出せり花器は居物に三才の石を錺り天石より竹を挿人地の石には荀一本宛遣ふ應合は竹の姿に順して四季とも花車成木物か草物を遣ふべし何の竹にても筍の有比は遣ふて宜し又細き荀の五六尺も伸たるを竹より高く遣ふて挿る事もあり筍採方口傳

三方正面之花挿方之心得

○此挿方は常の如く挿たる花の間へ心をとめて花葉枝を多く遣ふ是正面よりは見へがたければ無情の様なれども見へ隠れの姿にて左右より見る時は速かに見へ三方より見て花規矩に叶ひ姿の調ふ様に挿るなり是奥深くして餘情あれば常に此心を以て

挿事肝要なり或は留流しの姿に挿て其向へ扣て遣ふたる枝あり左右より見る時は此枝留と見へて流の枝に抱わらず花規矩に叶なり

福壽艸水僊根遣之心得 二ヶ條

○福壽艸は薄廣口に石を飾りて一色挿る事もあり又は白楳の應合にも遣ふ何れ白根を見せて遣なり其名尊き故なればなり

○水僊は陽氣に連て白根あがる故に春にいたれば玉根を遣ふ事あり居物に石を飾り砂留にして挿る又粐などの應合にも遣ふなり口傳

花首採方傳有品之心得 七ヶ條

○大輪之菊掛に挿る時用の花を居る採方又花首細くぶら〳〵としたるを採る傳有

○百合は花の臥す出生あり併し挿花にもちゆる時は一瓶の内にて二三輪はおこして取扱ふ傳あり

○杜若荅を遣ふべき處へ程よき蕾をつかひ挿おけば

頓而開花となり花形變ずるなり是に仍て開かざる
揉方有又花の軸ゆゞみて遣ひ勝手凶しきは直して
遣ふなり尤花菖蒲一八抔も同樣なり口傳
○芍藥の花揉方菊同樣自由に遣方あり曲りたる軸に
好花あれば直なる軸に添る傳あり
○椿程能處に花を添ゆる傳あり
○柘榴右同斷なり
○南天の實遣ひ方右同斷なり

銀柳米柳挿方之心得 二ヶ條

○銀柳枝なく五六尺も伸たるを三百本亦五百本も挿
る事あり半より下の猫をきれいに取て一本ッゝ直
に揉夫より一ッにして揉姿を拵るなり挿上傳あり
○米柳嫩枝數挿拵方右同斷尤姿は内用か留流し抔能
うつるものなり應合は葉物艸花見合遣ふべし木物
は椿にても遣ふ事無用

猫柳玉取挿方之心得

○猫柳を挿る時は躰の後に玉の姿を備ふ此出生に玉の景色あればなり尤挿方の多少には抱わらざるなり玉の取方口傳花器は置物にても居物にても宜し應合は葉物か草花に限るべし

猫柳水潜挿方之心得

○猫柳水潜に挿る時は廣口に黑白の砂にて水陸を分ち用流しか留流しに挿て水を潜らすなり潜て出たる枝に姿備れば至極よろし水中の處に冬咲の杜若抔應合て然るべし柳の根にも陸物草花を應合てよろし此柳は水邊に生出るもの故自然に水を潜たるも數多あればなり

糸柳長閑之景色挿方之心得

○糸柳長閑の景色は掛花器二重に挿る花の姿は都ての枝先に強く勢を持す事凶し唯柳の性にして風も不吹春の日に靜に下りたる景色なり留の座の枝は活に遣ふてよろし此挿方はしかと横姿備わらざれ

ども苦しからず是長閑の情なり下口の花にて慥に竪姿を守るべし又常の挿方は十分下りたる枝を活に採て次の條を死の枝と遣ひ死活々々と遣ふて横姿の備りたるをよしとす

糸柳春風に隨ふ景色挿方之心得

○春風に隨ふ景色に挿る柳は小しだれにて置花器か居物に挿る花の姿は用の柳を吹風の枝と採躰の枝を吹揚の枝と採る是躰用の挿方なり風景の柳なれば少の見切は許す應合は。椿。千兩。抔遣ふてよろし此外花車なるものを用ゆべし

糸柳雪中之景色挿方之心得

○雪の景色に挿る柳も小垂にて置花器か居物に挿數多の枝に雪の積りたる景色の採方なり尤應合を遣ふ事凶し又此景に抱わらず挿てよし姿豊にして面白きものなれども花形定難き物なる故初心の人には六ケ敷なり

綰柳挿方之心得

○綰柳は大垂の柳を三本を一ッに寄て根を輪に結ぶ是三ッより一ッに納る解は即三ッに歸る三即一也一即三也元拜領の柳なれば隨分長き所を愛し根を輪に結ひて挿たる處社綰柳なれ輪より下りたる柳の末に強き勢を持す事凶し此柳は實にして唯長きを尊のみなり花器は二重切の掛にて下口に白玉椿を竪姿に挿る花は五輪計遣ふ霜圍の葉を備ふ又船に挿る事もあり此時は帆花に椿を遣ふ船の釣方は常の船より一尺も高く釣るなり尤他流にても長き柳を拜領し切事を恐れて柳掛釘と稱し床の隅へ高く掛釘を打て夫より挿たる事あり又柳の末にて結ひ挿るもあり併し垂柳の末を結ひては情を失す故本意に背くなり

段取挿方之心得 九ヶ條

○羽衣草は五段より九段まて段を取て挿る先五段の

挿方は用に二段躰に二段留に一段なり又七段の挿方は用に三段躰に二段留に二段なり九段となればいづれも三段づゝなり且躰用と挿る時は内用前留株分等挿方花拵傳あり

○小車艸挿方前のごとし

○辨慶艸挿方前のごとし

○線繡菊挿方前のごとし

○小菊挿方前のごとし

○瞿麥挿方前のごとし

○富士芳哥眞挿方前のごとし

○男郎花挿方前のごとし

○女郎花段取居物に挿る時は株を分て出生の葉を遣ふなり此葉大根の葉に似たり組方向ひ合て組てよろし

右段取挿は其花の出生に應してなれば是に准じたる花は都て段取に挿てよろし但し五七九本位花車

に挿る時も段取の姿なり尤數は何程寄たりとも一段を一本のごとくに心得て拵るなり

蘭物挿方之心得 五ヶ條

○細蘭五段より九段まで挿方

○三角蘭前の如し

○琉球蘭前の如し此蘭は三角にて末に三葉ッ、三方へ出たるなり琉球表に用ゐる品なり

○富久蘭此出生は根元は株になりて蒲のごとくにて末は蘭の如くなり併し少し平みなり四季ともに有故に其時候の季節を備へ愛すべし此蘭は竪に腐の入たるもあり上品なり右四種の應合には杜若水葵花澤瀉匙澤瀉。猿猴草。川骨。此類を用ゆ

○太蘭竪島あり横腐ありし上品なり應合は蓮。川骨。此外水草何にても遣ふてよし尤三種五種も取合挿てよろし且又水陸を分て陸草を應合事もあり

右五種挿方口傳花器は居物を用ゆ又は置船。釣瓶。薄

端等口廣き器を用ひてよろし。杜若。を用に遣ひ藺の躰。川骨。を留に遣ふ挿方面白し

數挿物五種之心得 五ヶ條

○消棋數挿にする時は半より下をきれいに取眞直に揉置夫より長き短き中分と撰分躰用留と定め三ツに縛置夫より用は用の姿躰は躰の姿留は留の姿に揉て挿るなり五段に挿る時は五ッに縛置七段九段ならば七ッ九ッに分縛り置夫より揉合て挿るなり

躰用と挿る時は内用前留又留流等然るべし

○桔梗數挿右全斷の拵方なり

○蒼萩右全斷

○野芥子草右全斷

○角木賊右全斷

花器は置物居物見合遣ふ應合は花車なる草花のうるはしきを遣てよろし

軸付葉物十二種挿方の心得 十二ヶ條

○荻五六月穂出る蘇枋色にて麗敷なり此挿方は葉にて姿を調故に先ツ用に程能葉計を遣ひ夫より穂を二三本用の心にて入る尤穂に付たる葉は殘らず取て遣ふ夫より直なる葉を遣ひ又穂を二三本躰の心にて入又躰に立たる葉を遣ひ又穂を躰添より留の心にて入留に葉を入る尤穂の數は五七本より十五七本まで遣ふべし四季に若芽を生出故に寒薄などと唱て冬も用ゆなり葉の程能伸たるに。水僊。寒菊。

抔應合て挿べし是常盤草なり花器は見合穂の有時は應合草花遣ふてもよし遣はずともよろし

○芒穂に出ての挿方は荻と同樣なり穂の出ざる時も麗敷艸花を應合て挿べし竪島あり横腐あり箭といふ此二種は穂に出ては用ひず島芒は三百本計りも段取に挿て至極よろし尤花器は置物居物見合應合は麗敷艸花の花車なるを遣ふ此二種はまはし葉の傳あり拵方口傳

○檜扇の挿方は始三枚葉を組入る尤中葉長し夫より花を躰用留と入又葉二枚入る是三花五葉の平組なり又花七本九本も遣ふ時は前葉五枚組夫より花を入又二葉遣ふ是七葉の平組なり尚角組にする時は前五葉其左右へ二葉ッゝ入其中へ花十本以上半數に入又二葉遣ふ是角組といふ角軸にて角々より四方へ葉の出たる檜扇もある故角組の挿方あり組葉は根元を包む爲なり生出時は軸のなきもの故軸を見ぜて挿るは出生に背なり矮檜扇。國府。孔雀。鳳凰。何れも葉を組根を包んで挿なり尚挿方口傳

○紫蘭の出生は葉二方へ出て其中より花を生ず故に花瓶に移す時も此出生に隨ひ虛實を備へ葉を組直して取扱尤三本より九本位まて挿るなり大なるは三尺餘も伸るなり准じて軸も太く葉の巾も三四寸もあり拵方口傳

○巖蘭の出生も葉二方へ出て花は別に生出るなり挿

方は紫蘭同様中葉を組直して遣ふ葉にて花形を調へ花は二本か三本か葉に添ふて遣ふ是常盤草なり

○金雞蘭出生右同様挿方傳あり

○熊鷹蘭出生眞より花咲なり故に切葉にして葉にて姿を調へ挿るなり尤花なき時も草花を應合て挿てよろし是常盤草なり

○檀特艸出生挿方右同様花に付たる葉を用ひては面白からず切葉を遣ふて挿る事肝要なり

○縮砂四五月花咲て九十月實色付なり花の比も實の比も愛す花の軸に付たる葉を用ひず花咲ざる葉を遣ふて夫より花の咲たる如く挿るなり實の比も挿方同様なり

○鬱金蕉は組葉の中に花咲なり故に一方の葉を拂ひ二本寄て一本の心にて花葉をつかい挿るなり尤花三本位より上は遣ひかたきなり

○美人蕉眞より花を生ず花の軸に付たる葉は用ひず

たし別の葉を遣ふて挿べし是常盤艸なり

○芭蕉隨分小さきを挿べし應合は。大菊。を初艸花何にても遣ふ是艸の王なり右葉物はいづれも葉にて姿を調ふ各挿方口傳あり

葉物十種組方之心得 十ヶ條

○唐茶苣の出生は葉十方へ出て實の出る處其眞中に非ず故に葉にて姿を調ふ尤添て不添の葉堺葉をつかひ五葉か七葉か九葉まて組實の遣ひ處は躰の葉の後より一本用の葉の下より一本堺葉の後より一本いづれとも組葉の外より實を遣ふなり尤葉の丈に准じて實を高く遣ふなり

○岩蕗の挿方は用に大葉を入躰に少し小き葉を遣ひ躰用の添に小葉を遣ふ此葉小を力葉と唱ふ大葉々々の間に小葉を遣はざれば風流の姿出ぬたし花は組葉の中に遣ふ五葉一花但し二花亦七葉二花但し三花遣ふ九葉三葉花迄挿るなり堺葉を遣ひ株を分

る尤常盤物なる故に花なき時も艶敷艸花を應合挿てよろし。唐蓁吾。は大なる故に葉數十枚餘も遣ふ朝鮮蓁吾はしかみて小なり深山岩蕗。花葉とも三尺余も伸る葉先八手の如く細に切たり俗に一名し、艸といふ何れも挿方同樣なり

○寶子出生挿方右同樣一名般若艸といふ

○擬寶珠の出生葉も十方へ出て花は眞中より出生る葉にて姿を調ふ尤添て不添の葉堺葉をつかふて株を分花は組葉の中に遣ふ先九葉三花迄挿べし大中小春夏秋花咲あり類多し

○水芭蕉小なる物故七葉二花まで挿べし組方右同斷上品の物なり

○紫苑の生出は葉向ひ合て生出故拜葉と唱ふ挿方は用に大葉を入此上に拜葉を入る左右同性の葉にては凶し一枚は直にて一枚曲あるを遣ふ此中に用の花を入る又躰も合爪葉を遣ふて其中に躰の花を入

る留も是に准ず五葉二株七葉三株九葉三株迄挿る
なり元來一花三葉の出生なれば五葉にても一花七
葉にて二花遣ふは定法なれども此類は大葉にして
力強きもへに堺葉を遣ひ株を分て五葉二花七葉三
花を遣ふ事虚實なり
○芭蘭の挿方は三葉五葉七葉九葉より葉の丈に隨ひ
五拾枚余も挿るなり先七葉の組方は堺葉一枚遣ひ
二株に組む九葉十一葉にても堺葉二枚も遣ひ三株
にも組む此上數挿の時も堺葉を多く遣ひ株を分て
挿なり尤添て不添の葉も數を限らず程能遣ふてよ
し是常盤艸なる故に時候の草花を應合べし且芭蘭
に挿交應合の遣ひ方あり島芭蘭などを十三五葉位
常の如く挿て躰用の間。躰添の間。躰留の間。用用
添の間。抔へ。瞿麥。仙翁。の類をちらくと遣ふな
り至極麗敷事なり又。芭蘭の花。は三月より四月迄
咲なり此頃は外の花を應合ず客席へ挿て苦しから

ず廣口等へ挿る時は大葉二株三株も入其間々々へ尖葉に花をそへて應合べし尤砂留にて三才の石を飾る大廣口ならば天一地六の割を以て小石を居る是飛石の景色なり尚又二間三間の座敷抔にて次の間には成長の芭蘭を挿奥の床には薄廣口に石を飾り尖葉に花を添て二株三株も挿て出生を見せるも働なり又茶席の床などへも右の如く未生の姿を挿てよろし

○濱藜蘆出生組方花の遣ひ處左に記す万年青同様なり

○菖の出生は始に二葉陰陽と組て出又中より陰陽と組て出る此四葉東西南北をさしてひらく其中より三葉を生し一躰に七葉定りて花を生ず是に仍て挿花に愛する時も七葉に實一本添て一株と組む。躰々添。用々添。留と五葉にて姿を調ふ躰用の間へ若葉二枚是七葉なり躰添の葉は霜圍用添の葉は風圍

留の葉は實圍なり九葉十一葉十三葉迄は右三役の葉を遣ひ一株に組むべし實圍の葉は枯葉を交二三枚も遣てよろし尤十二三葉も一株に生々と榮へたる蓋も有ものなり又十五葉の組方は七葉五葉の二株を一ツによせ實圍三葉にて根元を包む尤實は二本遣ふ是七五三の傳の組方なり花の比より實のある間は客席へ用ひてよろし廣口等へ挿る時は時候の花車なる草花を應合べし大廣口に挿る時は種々の萬年青と取交五株七株も挿なり此時も應合物ありてよし右十種挿上各傳あり

長葉十種挿方之心得 十ヶ條

○胡蝶花の挿方は始に四五葉行義能組たる葉を入る是用なり其上に花を躰用と入れ夫より躰の葉三四枚遣ふ夫より留の花を入小葉の程能を入る是留葉なり又花數多く遣ふ時は堺葉を遣ふ花丈長き時は葉より高く遣ふ短き時は低遣ふてよろし小葉の行

義よく組たるを遣ふ事肝要なり

○鳶尾草此挿方花葉の遣ひ方右同斷兎角行義能組たる葉を以て挿る事肝要なり花は二本三本五本迄遣ふべし両品共掛にも挿應合等にも遣ふて宜し

○白頭花は古葉の中より若芽に花を持て生出るなり故に若芽計挿てよろし一株ツ、組てあり其儘挿る又古葉を添て遣ふてもよろし尤花は組葉の外に添ふて生ずるなり

○萱草は花組葉の外に添ふて出る萬年青の實の生ずる處と同様なり故に挿時は葉にて姿を調へ花は外より添て遣ふ株分にして二株三株も挿る一株に花一本ツ、遣ふ花圍の葉あるべし

○正宗菖蒲挿方行義能組たる葉は其儘つかふ又は組直しても遣ふなり花器は居物にて杜若の姿に二株三株も挿て。紅川骨。島葉の杜若。水葵。澤瀉。等應合てよし又水陸を分て花車なる陸草の麗敷をあし

らふてよろし花の咲ざるものなれども美葉故用ゆるなり

○島蒲挿方居物にて水草何にても應合てよろし又水陸を分て陸草をも應合なり尤初の内葉の格別伸ざる間尚よろし穂の出る比は葉十分伸て行義凶し尤常の蒲をも挿る葉にて姿を調へ穂は程よく葉に添て遣ふなり

○花菖蒲挿方花二輪遣ふ時は前葉三枚組む中葉短かし是を用の葉と入此上に陽の花を入る躰添と二葉入る花より短し其后へ陰の蕾を入る留葉二枚入る是れ七葉二花なり三花九葉の挿方は前五葉入花を躰用とつかひ葉を躰添と二枚入蕾を留と入留葉二枚入る十五葉五花の挿方は前五葉入此上に花を用添と二本夫より三葉堺葉を遣ひ花を躰添と二本夫より躰の葉長短に四枚入留に荅を入留葉三枚遣ふ此上花葉數多挿方あり花がつみ。あやめ。馬藺草。

此三種細葉ゆへ藺物のごとく葉を數多遣ひ花は其中へちら〳〵と程能遣てよろし又五七輪挿る時も組葉の儘にて右の心をもつて挿べし

○燕子花花葉遣方菖蒲に同じけれども花より葉を高く遣ふ又一處より花二本遣ふ事なし枝なき花故なり且冠葉と唱ふ遣ひ方等あり又正二月比の杜若は葉を組直す事成難き故に行義能葉を其儘遣ふなり將又四季咲は其時の景色を失なはざる樣取扱なり種々ありといへども紫白を上品とす

○雅蒜挿方葉の扱ひ指先にて自由に揉るなり四葉を一元として花一本遣ふ尤三葉五葉の中よりも花を生ぜといへども甚稀なり是に依て一花四葉と定るなり先二元の挿方は陽の株四葉にて躰用とそなへ陰株四葉の内二葉は躰添になる此葉一枚と見へる樣に重置なり二葉は留になる是陰陽と二元にて花形調ふなり此上三元五元七元葉の丈に隨ひ數多挿

る又廣口等にて至て數多く挿る時は大株を出生の
儘にて遣ふ事もあり小株は挿花の法に採るなり
○蘭は唐土より渡りし時は花一元にて誠に其香清潔
たる事言語に述がたしとなり我　朝にて次第に榮
へ花數多く生ずると雖も今に匂甚し夫五葉一花の
挿方は用に皮肉骨の備はりたる葉を入添に直なる
葉を入此二葉にて鳳眼を取る躰に勢強き葉を入添
ぱひらりと後へ返りたる葉を遣ひ留に直なる葉を
入躰添の葉と鳳眼を取る花は手前より入て躰用の
葉の中へ出す尤花の軸を隱す事凶し是花は組葉の
外より生ずる故尚又七葉二篠九葉二篠十一葉三篠
花三本是より株分等挿方あり一篠に三葉四葉五葉
位生ずる花器は銅土器よろし右十種挿上各傳あり

南性北性の罨挿方之心得

○南性北性の梅と名附し所以は客位に挿たる南性
の梅と稱し主位に挿たるを北性と稱す客位は陰よ

り陽をさして出る是陽中陰の挿方なればなり主位は陽より陰をさして出る是陰中陽の挿方なればなり楳の姿は一本の枝にて躰用と備りたるがよろし養に傳有て躰の枝は半開用の枝は滿開と一本の枝にて花の行義を定む留は別の枝にて荅計りを遣ふ尤躰の後へ女畫を取る程よき所へ若枝をつかふ花器は薄端等よろし

臥龍梅挿方之心得

○臥龍梅は荏土本庄鶴井戸村にあり此出生は大木となりて數多の朶土に進む勢あり既に其朶土に付ば又根を風し大木となる斯の如く漸々蔓延りて其姿龍の臥したるがごとし故に水戸君臥龍梅と稱し玉ふなり此姿を挿花に愛する時は廣口の向ふの隅より手前の隅へ振出して水を潛りたる枝を入る其枝に姿調ひたるがよろし夫より立伸たる幹を遣ふ此幹より出たる枝も土に進む勢に採てよし尤若枝も

遣ふべし砂留にして飾石あり各挿上傳あり

春牡丹冬牡丹挿方之心得

○此挿方は用に勢強き葉を澤山に遣ふ是獅々隱なり夫より滿開の花を用と入夫より黑木二本遣ふ是れに添て半開を躰の花と遣ふ此花に付たる葉を花隱しと唱ふ留に蕾を入又切葉澤山に遣ふ是爪隱しなり花器は薄廣口か薄端か手附大籠の類よろし又冬牡丹は八月比より咲なり花葉共至て艶しき物なり

幹付なれば挿方右同樣若又花軸短くして難花なれば取扱ひ傳あり葉行義備方右同樣なり

山吹玉川之景色挿方之心得

○此棣棠は水の流を愛するの挿方なれば廣口の中へ黑白の砂にて川の景色を移し蛇籠二ッ三ッにて留る花形は竪姿と横姿を二株三株五株も挿てよし元來棣棠は竪姿には挿かたき品なれども能枝を見立蛇籠を遣ふて挿たるぞ風流なれ蛇籠の寸法大はさ

し渡し三寸六歩長九寸小はさし渡し二寸四歩長七寸二歩中はさし渡し二寸八歩丈八寸右を景色能飾り愛すべし川の取方等傳あり

藤川骨杜若取合挿方之心得

○右三種取合挿時は廣口の中へ黑白の砂にて景色能水陸を分ち三才に石を飾る天石は白砂の處に居人地の石は黑砂の處に居る白色は陸黑色は水中なり故に天石の後より藤を挿る立蔓の面白き風情あるを用ゆ尤花は若き内よろし英下り葉澤山に生じては詠凶し人石より杜若七葉二花の横姿を入る地石に川骨三五葉に花を添入尤大廣口ならば何れも株分に挿てよろし

燕子花三州八ッ橋之景色を移し挿方の心得

○此景色は眞中に大川あり其左右に蜘手の如く四川宛ありて則八川なり此八川へ橋掛る故に八橋と唱ふ纔の廣口に黑白の砂を以て右のけしきをうつし

杜若を挿て八橋の挿方と稱す先廣口の眞中へ竪一文字に黒砂を以て大川を取向手前も小川四川ッ、備へ定法の居處へ大株を挿る花五輪以上手練に隨二十五七輪もつかふ葉は一花に三葉の割につかふ此株の後より廣口の中央へ向て蜘の巣とぢの葉三枚水を潜らせて出す此上に半開一輪追葉二枚是則五葉一花の横姿なり續て七葉二花の竪姿五葉一花の竪姿又七葉二花の横姿都合五株向手前の川々へ景色よく入其間々へ若芽を二三枚ッ、組て入る右のごとく八川のけしきを寫し挿時は聊挿ても八ッ橋の挿方と唱ふなり

萍蓬草挿方之心得

○此出生は始に二葉向合て開又二葉向合て開此四葉四方に開て其中より追々花葉を生出故に一株に何葉と定らず春の彼岸比より秋の彼岸比まで次第に中より生ずるなり此挿方は廣口にて躰用留は開葉

添て不添に半開其中へ角葉と花を姿より出生に應して遣ふ花の遣所も定らず躰能つかふてよし尤一花三葉の割なれ共五葉二花七葉三花十三葉五花をつかふて宜し夫より魚道を分て竪姿と横姿を入る尤花器に應して五株七株も挿べし尚傳あり暖氣なる風圍ひの宜敷所には寒中にも花葉共有なり

蓮川骨杜若水葵花澤瀉五種挿方之心得

○此挿方は大廣口に石五ツ飾る三才の外に水漚石といふを陰陽と遣ひ天石の後より蓮を挿る七葉二花か九葉三花を遣ふ魚道を分て大小浮葉を遣ふ人石に杜若五葉一花の横姿地石に川骨水漚陽石に花澤瀉陰石に水葵と遣ふなり蓮は主なるゆへに大姿に挿外の花は小姿に挿て瓶中的歴なる處を肝要とす

涅槃像へ奉献之花挿方之心得

○此時は糸櫻に島芭蘭の應合か糸柳に白玉椿の應合か右両品を挿て奉献べし當日は天下の有情非情に

至る迄自然に憂を催の意を含ていと艶き花を挿事なり卯月八日は石南花を挿て献すべし

實物取扱之心得

○凡天地の間森羅萬像姿に陰陽の備らざるものなし然るに實物は姿圓にして陰陽肉眼にて難分万物姿に陰陽の備らぬものは用要を達する事能はず死物なり故に實物を挿花に愛する時は陰陽備方傳あり

左旋右旋之論

○夫天は陽にて左旋し地は陰にて右旋するといへども見る事あたはず草木を以て是を考るに地中に陽氣有時生出草木は左旋し地中に陰氣有時生出草木は右旋す地中に陽氣を含は冬至なり此陽氣墜上へ發するは春分なり是に仍て冬至より春分迄に宿根より生出草木は皆左旋す又地中に陰氣を含は夏至なり此陰氣地上へ發するは秋分なり是に依て夏至より秋分まで宿根より生出草木は皆右旋す又春分

より夏至迄は地中地上共暑寒に片よらず陰陽和合の時候なれば宿根より生出草木左旋右旋等分に卷又秋分より冬至迄は地中地上共暑寒に偏よらぞ陰陽和合の時候なれば宿根より生出草木左旋右旋等分に卷又春分より秋分までに種を蒔て生出物は皆右旋す是地中陰なる故なり又秋分より春分迄に種を蒔たる物は皆左旋す是地中陽なる故なり誠に草木は天然寒暖の惠に隨て更に私心なし是を愛する

德に因て廣大の理自から明なり尙篤と考へ陰陽の働を悟べし

虛實之論

○挿花の姿一躰に虛實を備ふる所以を辨せば實なる草木を伐て縱横句弦の法形を備へ花葉を透し直きを撓曲れるを採て根を能ゝ挿たる處は虛なりといへども請人の好む處なれば是實なり虛實等分を挿花の法とすされば出生の儘の直なる枝は實にて詠

少き故に文たる虚を備へ曲をもたしめ皮肉骨調へば萬人是に進む故に虚は實となるなり虚實文質彬々たる處是萬物一切の法なり虚は則法の實ならん歟諸道具等に至る迄用を達する處裏にして皆虚なり人も背は實にして表なり腹は虚にして裏なり然れ共裏にて用を調ふ故に是を面といふ是虚實なり且人は虚を面にし實を中に含みて諸事行ふは仁の道なり畜類は實を面にし虚を中に含あり是に依て表は吉裏は凶則是を虚實と云用を達する處も實なり表なり且又人面獸心の者有是等は畜類同然虚實に事を致すなり右能々勘考有べし

花術心得草木人畜出生之論

○花道を學には能草木の出生の辨有べし諸木諸草樣々の姿さま〳〵の葉組花に種々ありと雖も其元は火水土三氣のなす處なり地中より天中へ生出時は陰陽と掌を合せたるごとくに出る是陽の姿なり然

るに天は陽なる故に和合にあらず和合せざれば成長する事能はす此葉開けば地の如くにて陰なり則天地合躰氣氣和合し漸々成長の上花さき實を結ぶといへども聲も發せず動働もせず惜哉是死物なり伐て挿花に愛する時は靈妙を備へ活物として取扱なり或人曰元より草木は死物にあらず既に地中より生し四季寒暖に隨ひ其性正しく春は陽氣につれて野山に錦を飾たるごとく花を持ち枝葉にも潤ひあり秋に至れば陰氣に隨ひ落葉あり是活物にあらすや朽たる木枯たる枝は是死物なり予云然り枯たる木枯たる枝は死物なり性ある草木は陽氣につれて悉く芽くみ陽氣に隨ふて衰ふるけしき有といへども活物にあらず偖人畜魚鳥蟲に至る迄性は心となりそれ〳〵に靈妙有て善惡を辨へ動働をなす此活物に睡といふ事あり睡ば則心意氣情なく性斗にして煩脳を去り死物に等し呼息は陽なり吸息は陰

なり両氣往來有て其躰を養ふ人躰勞るれば夢を結ぶ都て草木は活物の寢たるに似す善惡の辨へなし蕾開て休伏の息の通に等し故に手折伐りても其躰答のなきは活物の夢を見るかごとし既に其性は外に止りて皮肉の間を通ふ性有ども情なし此理を辨へて當御流にては死物に取扱ふ將又草木人畜魚鳥蟲に至るまて養有か故に成長するなり人は頭に養をして竪に成長す禽獸蟲魚は頭に養をして横に成長す草木は頭に養を受て逆に生育する物と知べし既に葉裏に陽氣の備はりたるゞ自然にして和合なれ尙又草木に節枝備はり中の透事善惡の匂有事此外樣々の出生活物の躰卵濕化の四生一段二段三段の出生に至るまで其悉しきは匂ひの一卷を開て是を知べきなり

蓋此卷の花形躰用なり是躰用變ずるの後其心を丹田に鎭て案ずべし躰は天地の間萬物一體の躰にし

て動かす用の働きは四時に移り更り千變万化して后其一に歸す則一體の躰なり此躰の未生已前を知て草木を愛す當御流花道は輕々敷慰にあらず風雅に花を挿さんてしかも萬法の根元を知らしめんが爲なりされば其蘊奥を極ずして當家花道の意見深長なる事夢にだも豈知る事を得べけん哉

花術體用相應之卷終

此一卷於當家雖爲秘玉書依執心今般令相傳者也

嵯峨御所花勢

未生齋廣甫法眼

明治三十七年二月十五日印刷
明治三十七年二月二十日發行

非賣品

不許複製

發行兼編輯者　海東郡津島町字本町五百四十四番戸　佐藤新兵衛

印刷者　名古屋市針屋町三十一番戸　小池清

製本所　名古屋市南園町二百七十番戸　岩田三友堂